

「2017年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクールプログラム参加報告書」

京都大学農学部2年 西川寛太郎

「花萼聯輝」

僕がこのプログラムに参加した理由の一つに「蓮」がある。僕は農学部にも所属しており、花が好きでももちろん蓮も例外ではない。以前テレビで辺り一面に咲く蓮を見てベトナムに行ってみたくと思った。残念ながら私が行った9月にハノイではあまり蓮が咲いていなかったが、私の考え方、価値観を変える、花に関する話をいくつか聞いた。そのうちの2つを紹介したいと思う。

「花萼聯輝」この言葉は私がドンラム村に行った際に、案内された古い民家に住んでいるおじいさんが教えてくれた言葉である。この言葉は、花が花びらと萼が合わさって、輝くように、二つのものがうまく統合して力を発揮するという意味だ。この言葉は彼の一番好きな言葉であり、にこにこしながら、ベトナムと日本もこのようにうまく力を合わせ、いい関係を築き、輝いていけるようにしたいと言っていた。日本とベトナムは以前戦争をしていた。しかしその後は、良い関係を築いており、今後も両国がお互いの発展について多面的に協力していければと思う。

Trong đầm gì đẹp bằng sen

Lá xanh bông trắng lại chen nhị vàng

Nhị vàng bông trắng lá xanh

Gần bùn mà chẳng hôi tanh mùi bùn

これは、ベトナムの蓮を題材にした、ベトナム人なら誰でも暗唱できるほど有名な詩である。直訳すると「沼に生えている蓮ほど綺麗なものは無い。葉は青々としていて、花びらは白く、雄しべは鮮やかな黄色である。蓮は泥の中に生えているにも関わらず、臭くない。」となり、この歌を教えてくれた友人は、ベトナム人の精神をよく表していると言っていた。昔、ベトナムは、過去には何度も外国から攻められており、植民地とされたこともあった。そのような厳しく過酷な状況でも、人々は精神を正しく保ち生きてきたと、その友人は続けた。現在もベトナムは発展途上国であり、日本ほど清潔でも、交通の秩序があるわけでもない。この2週間で多くのベトナム人に会い、彼らの多くは、決して満足できるような環境にあるわけではなく、ベトナムでの生活に十分には満足していないことを教えてくれた。しかしながら、覚えてたの日本語で僕たちと話してくれた日本語専攻の学生達、大学の先生達、毎朝バインミー（ベトナム風サンドイッチ）を売ってくれた店のおじさん、ベトナム語がわからない僕にお互いに拙いながらも英語でコミュニケーションを取ってくれたウェイトアの女性、僕たちを家に招待してくれた友人、そしてその家族の方々など、僕が2週間の間で会ったベトナムの方全員が、蓮のように、強くたくましく、そして、輝いて生きていた。

このプログラムを通して、様々なことを学んだが、そのどれもが、本や教科書、インターネットを通してでは得られないものばかりであった。外国の大学、大学院で学ぶことは、学問的な意義ももちろんあるが、その他にも文化についても同時に学ぶことができ、人生をより豊かにする結果をもたらすのではないかと考えた。現在、部活動をしているため学部中に長期留学することは難しいと思うので、大学院で外国の大学に留学することを考えるいい機会になった。このプログラムを運営し、学生が学ぶ場を提供してくださった、先生の方々、職員の方々には本当に感謝している。